

うつわ紀行

— 京都・五条坂 —

文／中川知英 写真／ガウディハイズ

木の色、空の紋様、 そして金の輝きとのコラボレーション。 優雅で格式が高い、截金の世界。

木匠 中埜暢人さん / 截金師 中埜朗子さん

京都・清水寺のほど近くに、

もともとは仏具をつくっていたという中埜唐木工芸がある。

現在、中埜暢人さんは、奥様の朗子さんと二人三脚で、

木地に金箔やプラチナ箔をはりつけて

紋様を形づくっていく截金という装飾方法で、

茶托や皿、香合、棗などの茶道具、アクセサリーをつくっている。

木の木目の美しさ、それを生かす造形、

さらに截金という飛鳥時代からの装飾技法。

漆黒に金という蒔絵とはひと味違う、截金の世界。

木地を生かした金の紋様とはいかなるものだろうか。

神秘的な紋様

「空に魅せられた、

櫻、桑、黒柿、楓、枳への思い。」

「唐木とうたっていますですが、今は、日本の木もどんどん使います。広葉樹が好きなので、櫻、枳、楓、桑、黒柿などが主ですね」と中埜さん。

杉など平行の木目が多い針葉樹に比べ、広葉樹は木目の紋様が様々で装飾性の高い空が多い。

「若い頃、岐阜の銘木の市に行って、櫻の玉杵や黒柿の孔雀杵など広葉樹の杵に見とれてしまいました。おもしろい杵が出るのが広葉樹の魅力ですね。」

例えば櫻。木目がはっきりしているのが特徴で、力強く男性的。大きな木なので、お盆など大ぶりなものによく使うという。逆に、枳や楓は木目のラインがやわらかく女性的。中でも、中埜さんが一番意識しているというのが桑。「茶道具の材として最高級なので、棗や香合をつくる時は桑を使います。桑は、年月が経つと木肌が褐色に変化するので、截金が映えるんです」。そして、マニア垂涎のなのが黒柿。いわゆる柿の木なのだが、ごくごく稀に、切ると黒い縞の入った杵があり、正倉院にも納められているほど、昔から珍重されている。

「出合いなんです。同じものはありません。市へ行くと、もうわくわくして、気に入ったものはつい買ってしまいます。でも、切るのもったいなくて、本当は眺めているだけで満足なんですよ」。木の杵を心底愛する中埜さん。天からの贈り物ともいえ

桑の色の変化を利用した新作のお皿。ツートンカラーに、截金を装飾している。桑截金木地画皿3万6750円。





優雅で美術品のような香炉。桑
截金香壺68万2500円。中笠
さんがデザインした純銀の火屋
(ほや)もついている。

ないように、なめし皮を台にし、
竹刀で切っていく。ナイフのよう
に先で切るのではなく、包丁で豆
腐を切るように、竹刀を上から下
におろす。幅は、木地の作品に合
わせて、目分量で切っていく。
「竹刀をつくるのが一番大切な
んです。金箔が均等に切ることが
できないとだめですから」。食材



2

4

1

3



1. 櫻截金皿(輪花)5枚組5万2500円。
2. 櫻截金皿(精円)5枚組6万3000円。
3. 拭漆櫻八角鉢2万1000円。
4. 拭漆楓輪花鉢2万6750円



木地に優雅さを吹きこむ、 截金の紋様と輝き。

る、空の神秘的な紋様は、心を揺さ
ぶる何かがある。

中 埜さんは、作品を木の塊か
らすべて轆轤でつくって
いる。

「ベースはすべて円なんです。
その円を分業制でつくる産地も
のと差別化するために、変化をつ
けようとワンポイントで象嵌を
したり、造形のデザインを考えた
り。だから、本はたくさん見まし
たね。図案集や植物、アール・ヌー
ボーのものなど。特にアール・
ヌーボーのラインが好きですね」
轆轤でつくった木地に変化を
つけることの二つが截金だった。

飛鳥時代から続く仏像や仏画に
施される宗教芸術。「仏像の截金
を見た時、素直に凄くと思ったん
です。金は、色ではなく輝きなん
ですよ」。その輝きを身近なも
のに、と京都の大仏師が開いてい
た截金教室に通ったのが奥様の
朗子さん。

「とても細かい作業なんです
が、私の性分には合っていたんで
すね。紋様になっていくのが楽し
くて」と朗子さん。熱処理をした
金箔を4枚重ねて、静電気がおき



中埜さんが大事そうに見せてくれたのが、制作途中の黒柿の棗。なんと孔雀塗だ。



手前が金箔を切るための竹刀。竹刀づくりが重要なポイント。



奥が竹刀で切った金箔。髪の毛ほどの細さ。



右手に糊をつける筆を持ち、左手で金箔をおいていく。気の遠くなるような緻密な技だ。



木と截金の魅力を、工芸品やアクセサリーで表現する中埜さん夫妻。



桑木地画皿2万1000円。



桑木地画皿(輪花)2万6750円。

個展スケジュール
●松坂屋名古屋本店
南館6階アートスペース
3月21日(水)～3月27日(火)

●プロフィール
中埜暢人 1954年京都生まれ。1977年
武蔵野美術大学卒業。1978年石川県山
中町立漆器研究所で轆轤挽きを習う。
1979年家業の唐木工芸を継ぐ。

中埜朗子 1957年東京生まれ。1980年
東京女子大学卒業。1984年松久宗教芸
術院截金教室で截金を習う。1993年日本
工芸会正会員認定。

「桑は、最初は黄褐色なんですけど、年月が経つと灰汁が出て、褐色に変化するんです。その特性を利用してみたくです」。

黄褐色に残しておきたい部分にマスキングをし、褐色に変化させたい部分に石灰水をぬると同時に色が変わる。彩色せずに、ツートーンの色が楽しめる、まさに木の特性を生かしたデザインだ。

木の杢をこよなく愛する中埜さんがつくり出す造形は、木への温かな眼差しと遊び心にあふれている。そこに朗子さんの截金を加わることで、さらに輝きを放つ。木の色、杢のデザイン、そして金の輝きとのコラボレーション。オリジナルな風情もあり、アール・ヌーボールのような優雅さもある中埜さん夫妻の截金の世界にぜひ、足を踏み入れてほしい。

旺盛なチャレンジ精神が、 オリジナルな 世界を生み出す。

オリジナルなものを生み出すために、新しいことにどんどんチャレンジする中埜さん。新作は、桑の色の変化に目をつけた。

「私は、曲線が好きなので、カーブはギャザーをよせていく気持ちで箔をおいていきます。土台の木の色が美しいので、太い線ではなく、細い線を何本か入れ、時にはプラチナ箔を織り交ぜながら、木地が見えるよう、かろやかに表現したいと思っています」。曲線の動きがとても優雅で、まるで踊っているかのよう。格式が高く、重厚感があるが、木なので持つとても軽いので使いやすい。

どんな世界でも道具は大切なのだ。竹刀で切った箔を、細い筆にとり、もう片方の手に持った筆に糊(膠)をふくませ、木地につけながら、その上に箔をおいていく。下書きの線より箔の方が細いので、下書きはせず、木地から思い描いたイメージで仕上げていくという。

「私は、曲線が好きなので、カーブはギャザーをよせていく気持ちで箔をおいていきます。土台の木の色が美しいので、太い線ではなく、細い線を何本か入れ、時にはプラチナ箔を織り交ぜながら、木地が見えるよう、かろやかに表現したいと思っています」。曲線の動きがとても優雅で、まるで踊っているかのよう。格式が高く、重厚感があるが、木なので持つとても軽いので使いやすい。



紫檀截金ブローチ2万円。真ん中には、貝をデザインしてはめ込んでいる。個展の時、アクセサリー類は、ご婦人方から非常に人気という。



紫檀截金ネックレス9000円。同じものを、テレビのCMで吉永小百合さんが常留めとして使用していた。